

近森リハビリテーション病院 画像診断部

中村 伸治

概要

検査は1名で行っているが、中村伸治または、池三二雄が担当している、二人が不在の時は久保行広、林憲司が代行している。新型コロナウイルス感染症はほとんど見られなくなったが、たまに感染者が現れ、装置の養生や清拭、撮影後の換気を行うなどの対応をしている。放射線機器は、16列CT装置はたまに立ち上げミスがある他、OSであるところのウィンドーズが反応しなくなる例があった。メーカーに見てもらったところ、基盤の抜き差しで復帰したが、パソコン本体の劣化があるかもしれないとのことだった。X線TV装置（一般撮影装置）は、X線を受け取るFPD（フラットパネルディテクター）が反応しなくなり、メーカーに修理をお願いしています。現在はメーカーからの代替品で対応しています。検査数はCT、VF、一般撮影共に微増、撮影枚数は増加した

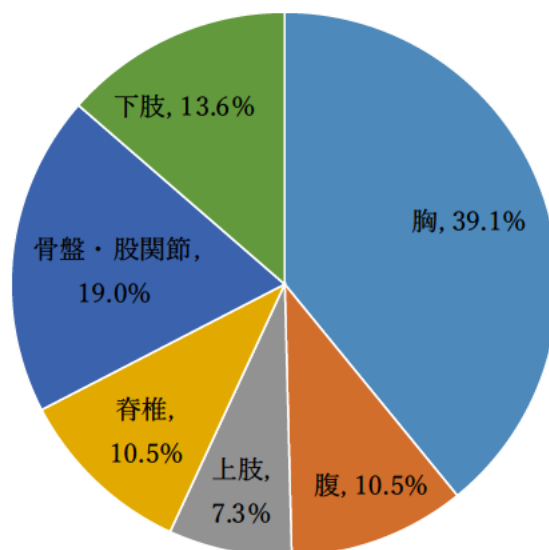
検査件数

2025年の各検査における前年比は、単純CTが6.6%、嚥下造影（VF）が1.4%、一般撮影が5%であった。表1に2021年から5年間の検査件数と図1に2025年一般撮影部位別の割合、図2に2025年単純CTの撮影部位別の割合を示す。2024年から整形の患者さんが増えて、さらに2025年は件数も増加、撮影枚数も増加したと思われる。

表 1：検査件数 (件)

検査 \ 年	2021	2022	2023	2024	2025	前年比
単純 CT 撮影	783	803	736	561	598	6.6%
嚥下造影(VF)	544	390	321	282	286	1.4%
一般撮影	1522	1556	1509	1820	1911	5.0%
(撮影枚数)(枚)	2436	2740	2654	3511	4042	15.1%

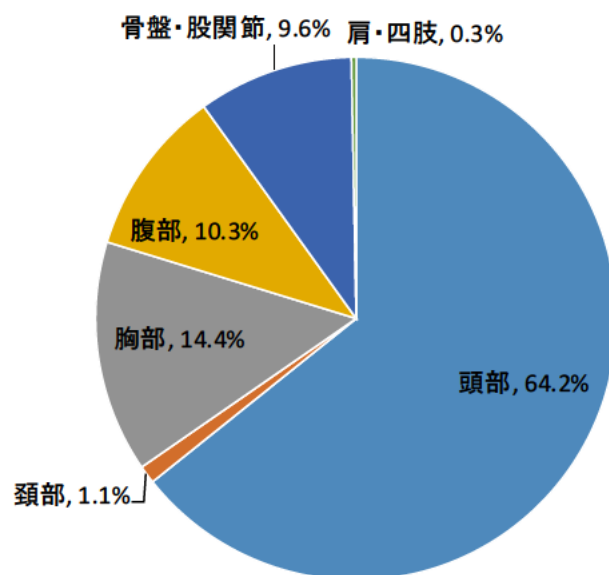
図 1



一般撮影部位別割合

- ・件数は前年より 5%増、胸腹部が 2.6%減少し代わりに上肢、下肢の撮影が増加。整形関係の撮影が増加し、撮影枚数も前年比 15.1%も増えている。

図 2



CT部位別割合

- ・件数は 6.5%増、四肢の CT はインプラントがあることが多く、本院でアーチファクトを低減して撮影することが多い。

放射線医療機器

16 列 CT 装置は、画像の荒れ具合により X 線管球の劣化の目安になる信号雑音比（SN 比）をユーザー定期点検で毎月測定している。著名な定格低下は見当たらない。また、定期的な暖機運転を行うことで、X 線管球への負荷を抑えている。今期は立ち上げで、基盤の認識が不良となったが、基盤の抜き差しで復帰した。パソコン本体の劣化が考えられるとのこと、頻繁に起こるようなら、パソコンの交換が必要になるとのこと。

X 線 TV 装置（一般撮影装置）では、昨年出ていたモニタに現れる縞模様のノイズは A/D 変換装置に問題があることが分かり、部品を交換することで解消することができた。メーカーによる定期点検を年 2 回、日常点検、暖機運転などを怠りなく実施、装置の状態を確認しながら使用している。

FPD（フラットパネルディテクタ）は 1 枚で運用している。装置が突然 FPD を認識しなくなってしまった。メーカーに見てもらうと、本体と FPD との通信が出来なくなっているとのことで、FPD は修理に出してもらっている。幸いメーカーに代替品があり、代替品を使用して、検査には影響はない。FPD は、1 枚で運用している。透視撮影ができる特殊なもので、かなり重量がある。透視に使う時、胸部撮影をスタンドで取る時、接続部の切り替えをその都度行う。骨撮影が多くなるとパネルの重量と接続の切り替え作業で大変である。新規撮影室を考慮したい。

医療ガス

3 ヶ月ごとにアウトレットの点検、毎日、酸素ボンベと吸引施設の点検を行っている。アウトレットの点検には、2 人で回することで時間の短縮、効率化を図っている。

診療用放射線の安全利用のための研修

放射線作業従事者である医師 7 名、診療放射線技師 1 名は、e-learning による研修を受講。

来年の目標

通常の業務（一般撮影、CT、造影検査）はもちろん、毎日の酸素圧や吸引施設の点検、3 ヶ月に一度のアウトレットの点検を行う。業務改善のため、マニュアルの見直しを行っていきたいと思う。